

このトーナメントは日本テニス界の大先達であり、世界的に有名な故熊谷一彌氏が湘南地区のテニス愛好者の親睦と若者の技術向上の為に寄贈された優勝杯をめぐる覇を競うトーナメントであります。ここに熊谷一彌氏の偉業を偲び、若いテニス愛好者の目標・励みになることを希望します。

熊谷一彌氏の偉業

- 1913年（大正2年） 慶応義塾大学理財科（現経済学部）在学中、慶応義塾大学庭球部が日本の大学庭球部としては初めて軟式から硬式テニスに転向した。この年硬式テニス転向8ヶ月目でマニラに遠征し、単で準決勝まで勝ち進み、フォットレル（米）に大接戦の末敗れる。
- 1915年（大正4年） 第2回極東選手権（極東オリンピック）単複優勝
東洋選手権（マニラ）単優勝、複準優勝
- 1916年（大正5年） 慶応義塾大学卒業と同時に米国遠征、ニューポート大会 全米第1位のジョンストンを破り単優勝。ニューヨークステート選手権・セントラルステート選手権 単優勝。
全米ランキング第5位。
- 1918年（大正7年） 全米選手権・準決勝でチルデンに敗れる。
ニューヨークステート選手権・メトロポリタン大会 単優勝。全米ランキング第7位。
- 1919年（大正8年） 第1回南北選手権（パインハースト）単複準優勝。チルデン3-1熊谷。
チルデン・ジョンストン3-1熊谷・ボッシェル。
グレートレーク大会単優勝、チルデンをして「クレーコートでは熊谷が世界一だ」と言わしめた。

熊谷3 $\left\{ \begin{array}{l} 6-2 \\ 10-8 \\ 8-6 \end{array} \right\}$ 0チルデン。

全米選手権、準々決勝、チルデン3 $\left\{ \begin{array}{l} 6-4 \\ 6-1 \\ 1-6 \\ 4-6 \\ 6-2 \end{array} \right\}$ 2熊谷。

ニューヨークステート選手権・バージニアステート選手権・オールドドミニオン大会・ナイアガラ大会 単優勝。全米ランキング第3位。

- 1920年（大正9年） 第7回国際オリンピック大会（ベルギー・アントワープ）単複準優勝（パートナー柏尾誠一郎氏）日本オリンピック史上初の銀メダル。フロリダ選手権・ニューヨーク選手権・メトロポリタン大会・ヨンカース大会・リッチモンド大会・ノーフォーク大会 単優勝。全米ランキング第4位。

- 1921年（大正10年） 日本デ杯チーム（熊谷・清水・柏尾）がデ杯初参加。インターゾーン決勝
日本4-1オーストラリア。
チャレンジラウンド決勝 アメリカ5-0日本。
熊谷・清水両氏の活躍によりチャレンジラウンドまで勝ち進んだこの戦績は、今日でもデピスカップに刻み残されています。又このデ杯戦で獲得した基金により今日の日本庭球協会が設立されました。
南北選手権（パインハースト）単複優勝。
全米ランキング第7位。

- 1958年（昭和33年） 紫綬褒章受章。
1965年（昭和40年） 勲4等旭日小綬章受章。
1968年（昭和43年） 8月16日 鎌倉にて没す。
従5位に叙せられる。



1916年（大正5年）ニューポート大会で当時全米ランキング第1位のウィリアム・ジョンストン選手を破り、単優勝した時の、熊谷一彌氏とジョンストン氏。